

僕が娘に話した世界史

経済からみた私的世界史

横山 幸仁

第1章世界大戦以前の世界経済の様子.....	1
前書き	1
とっかかり	2
教科書から歴史を読む.....	3
世界大恐慌と軍需産業と財閥.....	5
矛盾をとく鍵は『まけない賭け』	16
ヒトラーの心理術と皆が yes という社会.....	18
第二次世界大戦の経過.....	20
世界分割.....	26

第1章世界大戦以前の世界経済の様子

前書き

この書の目的は、歴史の一般常識に「経済」（マネーの流れ）を絡めながら別の視点からもう一度、世界を見てみようというものです。

私には娘がいます。世界史の嫌いな娘に歴史のダイナミックさを教えたくて書きました。歴史の見方は、さまざまです。歴史は文系の科目というより、史実のパズルをならべ、出てくる絵を探すと、なぞに満ちたミステリーと発見の連続でもあります。

今回は、たくさんの人にとってわかりやすく、容易に理解できるように、難しい単語を極力使わないようにしました。その分、根拠の詳細が知りたいという人のために、データとともに説明文も付加しました。

世界の歴史の中で、ヒトラーやムッソリーニ、あるいはケネディー元大統領のように自殺・銃殺（暗殺）される人もいれば、その影でそれを利用して栄華をずっと誇る財閥・企業群が存在します。私は、欧米の財閥による陰謀論を説くつもりはありません。注意してほしいのは、この書でたびたび出てくるロックフェラーとロスチャイルドを私は陰謀の首謀者とは考えていません。

ただし、世の中の経済活動を握るのは企業活動であり、市場の論理でもあります。彼らはその胴元としてうごき、企業群の方向性を指示する団体なのです。彼らの動きを史実として押さえておく事が歴史を考える上で重要になってくると思います。世の中は企業群・財閥系金融家たちの動きに企業群が追随するために経済を中心とした世

界情勢が移り変わってきました。この書はその企業の理屈から見た世界史です。
現代社会の中で、誰が利益を得、誰が損をしているのかが分かっていたら幸いです。

実際の経済活動の必然的な結果としての歴史を知ることが、学校で習う歴史より、ダイナミックで劇的なものであり、是正されなくてはならないことなのです。真実を知ることがこれから皆さんが私を含めてどうやって社会と接するのかという原点を導き出す唯一の手段となります。

とっかかり

世界大戦以前のお話。

私には、学校が嫌いな娘がいる。勉強する理由がわからないからだそう。親や先生が喜ぶからとか、将来良い会社に就職できるからという理由は、私の子供にとってあまり意味がなく、娘は悩んでいることを知っていた。

私は娘に言った。

「知ることの喜び、香りの良い学問の楽しみを教えてあげよう。どんな教科がきれいな
の？」

娘はキョトンとして私に尋ねた。

「英語かな。」

「でも英語はこれからの世界はどんどんと交流がさかんになり、必然的に仕事や社会で使うことが必要になるんだ。といっても英語と無縁で暮らすことだってできる。別に英語である必要性は特段ない。でも他国の言葉を勉強するということは、文化を知ることであり、異文化の人たちと交流ができるってすばらしいことじゃないかな。言葉というのは文化の中心なんだ。ほら、日本語なくして日本人はありえないんだから。」

すると娘はうなずきながら言った。

「社会科みたいになら暗記する教科はうんざりだし・・・別に過去に何があっても今の自分には関係ないし・・・」

私は、なるほどとうなずいた。

「今の自分がなぜ今こうやって生きているのかふしぎじゃないか？」

「そういえば、おとうさんと毎年行っていたタイの孤児院へのヘルパーのとき、どうしてこの人たちは親に捨てられ、貧乏なのか不思議だった。」

娘は少し考えていた。

私は娘にゆっくりと話した。

「歴史をお父さんと一緒にやろう。つまらない教科だと思っているだろうけど、歴史は暗記物じゃないんだよ。歴史的に起こった事件や社会現象をパズルだと思えば良い。」

娘は首をかしげていた。

「勉強するのは、抽象的なことから、具体的なことを予測したり、逆に具体的なことから抽象的なことを導き出す作業なんだ。数学を思い出せばいい。公式からさまざまな問題を解くと思えば、逆にさまざまな問題から公式を導き出す作業もある。社会問題や歴史も一緒なんだ。」

娘は矢継ぎ早に言った。

「どんなパズルが完成するの？」

「うん、それはわからない。けれど歴史はダイナミックですごいものだ。人類の英知と世界を絶えず正しい方向に変えてきた大衆の力には圧倒されると思うよ。歴史を学ぶ楽しさは人類の希望を学ぶことなんだ。」

娘は半信半疑ながらも言った。

「素敵なパズルが完成すると良いね。」

「今回は世界史の近代について一緒に考えよう。そうだな、第二次世界大戦からはじめよう。」

まずはパズルの基本ピースを探すため教科書をおさらいしてみよう。

教科書から歴史を読む

私は娘と一緒に世界史の教科書を読むことにした。以下は教科書の抜粋です。

第二次世界大戦のはじまり

ヨーロッパでは、1939年ヒトラーを指導者とするドイツはソ連と不可侵条約を結んだ後、ポーランド侵略を開始しました。それに対し、イギリス、フランスはドイツに宣戦布告し、第二次世界大戦が始まりました。

ドイツはパリを占領し、バルカン半島も征服して、ヨーロッパの大部分を支配しました。また、ドイツは1941年には不可侵条約を破ってソ連へ進撃しました。イタリアはドイツと手を結びました。ドイツは各地でユダヤ人を捕らえて、強制収容所へ送り、数百万の命を奪いました。

アジアと太平洋に広がる戦線

日本は1940年ドイツ・イタリアと日独伊三国同盟を結ぶ。ドイツ・イタリアがヨーロッパで、日本がアジアで指導的地位につくために、協力し合う事を目的としていました。さらに1941年には日本はソ連との間に日ソ中立条約を結び、北方の安全を確保した上で東南アジアへの侵略をおしすすめようとしていました。

中国との戦争に欠くことのできない石油やゴムなどの資源を東南アジアに求めたのです。こうした動きにアメリカは、ドイツに対しては、イギリスとともに大西洋憲章を発表し、日本に対しては、石油やくず鉄の輸出を制限し、イギリス・オランダと協力して日本を経済的に孤立させようとしていました。アメリカは満州事変前の状態に戻すことを求め、交渉が

行われましたが、交渉は決裂し、日本はアメリカと戦う姿勢を固めました。

太平洋戦争

1941年12月日本はイギリス領であったマレー半島に上陸する一方、これと平行してハワイの真珠湾にあるアメリカ海軍基地を奇襲しました。日本はアメリカ・イギリスに宣戦しアジア太平洋戦争が始まりました。

日本軍ははじめ勝ち進み、シンガポール・インドネシア・フィリピン・ビルマ（ミャンマー）などを占領しました。これらの地域は欧米諸国の植民地でした。日本はそれらの地域を欧米の支配から「開放」し、アジア諸民族だけで栄えていこうという「大東亜共栄圏」の建設をとねました。しかし実際には、住民にきびしい労働をしいるなど圧政をおこなったため、各地で日本への抵抗運動がおこりました。

満州

戦争が長引くにつれて、米をはじめ、ほとんどの生活必需品が配給となり、人々の生活は苦しくなりました。量は不足し質も低下したので、人々は非合法の闇市にたよったり、農村に買出しに出かけたりしました。特に金属製品は兵器の製造にまわされて不足したために陶磁器製のやかんやアイロンなどの代用品が用いられました。しかし、それでも物は十分ではなく、飢えと困難のなかで生活が続きました。多くの人々は「正しい戦争」であると信じ、この生活に耐えていました。

1941年にそれまでの尋常高等小学校は、国民学校となり、軍事教育が強化されました。後には、中学生や女学生が勉強を中断して軍需工場で働くようになりました（勤労働員）。日本が不利な情勢になると、それまで徴兵されなかった大学生たちも戦場に出かけていきました（学徒出陣）

1944年になると空襲が激しくなり、東京や大阪などの大都市はもちろん、軍事施設や工場のある中小都市も攻撃され、多くの小学生が空襲を避けて、農村へ集団疎開を行いました。

1942年、ミッドウェー海戦での敗北以後、日本の戦局は悪化しました。日本軍は太平洋諸島でのガダルカナル島での戦いに負けて撤退し、戦争の主導権を完全に連合国側に奪われました。南洋群島のサイパン島がアメリカ軍によって占領されるとここを基地として、日本本土の爆撃もおこなわれるようになりました。

ヨーロッパ戦線でも連合国軍が反撃を開始していました。1943年9月にイタリアが降伏をし、45年5月にはドイツも降伏しました。戦局が変わる中で日本では東条英機首相が退陣をし、1945年からは本土決戦が叫ばれるようになりました。

一方、沖縄戦と前後して連合国側はヤルタ（ソ連）とポツダム（ドイツ）で会議を開き、ポツダム会議では、アメリカ・イギリス・中国の名で日本の無条件降伏を促す共同宣言（ポツダム宣言）。しかし、その宣言を日本が黙殺したため、戦争の早期終結を目指すアメリカ

は8月6日に広島へ、8月9日に長崎へ原子爆弾を投下しました。広島に原子爆弾が投下された後、ソ連も日ソ中立条約を破って、「満州」や樺太などに攻め込んできました。日本は8月14日にポツダム宣言を受け入れて降伏することを決め、翌8月15日天皇はラジオ放送でこれを国民に知らせました。

娘は言った。

「お父さん、どう面白い?」

私は微笑んだ。

「この史実だけでは、つまらないといえば、つまらない。言っただろう、パズルだって。これではピースが足りないからお父さんがピースをこれから足してみよう。」

世界大恐慌と軍需産業と財閥

私は、静かに言った。

「では、第二次世界大戦はなぜ起こったんだい?」

娘は教科書を見ながら答えた。

「ドイツがポーランドを侵略したから。」

私はうなずいた後言った。

「そのときの」ドイツの指導者はだれ?」

「ナチスドイツのヒトラー総統。」

私はうなずきながら、教科書に書いてはいない話をすることにした。

「ヒトラーの前にひとつ教えておくことがある。第一次世界大戦を経て、アメリカでは戦争で荒れ果てた地区を復興するために、アメリカでは工場が乱立された。みんなが必要とするモノを作るための民需企業のほかに、軍隊が必要としている兵器をつくる軍需産業が入り乱れるようになった。今はその傾向は少なくなったが、アメリカは未だに軍産複合体と言って人殺しの兵器を作る軍需産業と私たちの生活の必需品を作る民需産業が一体となる産業構造があったんだ。GMって会社、知っているでしょ。」

「アメリカの車を作る会社でしょ」

「正解、よく知っていたね。そういう私たちの生活を支える工場も裏では兵器を作って痛んだ。現在ではGMの軍需部門は減ったけどね。これは驚くことではなくて、たとえば日本では三菱重工業は戦車、戦闘機などを作っているし、川崎重工業、三菱電機、日本電気(NEC)、石川島播磨重工業だって軍需産業だ。電気屋さんに並んでいるメーカーで東芝や富士通といったメーカーも軍需産業のトップ10に入っているんだよ。」

娘は怪訝そうな顔をしていた。

「軍需産業について言えば、日本より桁違いなのが、欧米の国々なんだよ。日本の三菱重工業は世界で見れば2007年統計で世界で22位。ランキングの上位は圧倒的にアメリカや

ヨーロッパなんだ。世界の武器輸出国の上位はアメリカ・ロシア・フランス・イギリス・中国・ドイツなんだ。ドイツを除けばそのほとんどが国連の常任理事国といった顔ぶれだ。が中心となっている。参考までに覚えておこう。核兵器をもっているのも、アメリカ合衆国、ロシア連邦（旧ソ連）、イギリス、フランス、中国といった同じ顔ぶれだね。国連とは何かを考えると参考にしてみるといいね。」

黙っている娘に私は続けた。

「この軍需という言葉をおぼれないうにするんだよ。誇りに思っているのは、日本人は日本国憲法という平和憲法を持っていることだ。敗戦によって押し付けられた憲法だという人がいるけれど、日本人は『平和』をうたったことだ。戦争を放棄し、軍備を持たないとうたったことだ。」

娘はやつぎばやに言った。

「でもでも軍備をもっている。人殺しの武器を持っている。憲法と合わない。」

「確かに。中学生になれば、日本が自衛隊をもち、戦車や鉄砲で演習をしたり、イラク戦争時にアメリカの燃料を輸送する役目を担っていたのも事実。でも敵国が攻めてきたときに武器がなければどうするの？という議論もある。」

娘は黙っていた。

「大人になるということは、きちんと理論武装して社会的に責任を果たすべく態度をとることが大事なんだ。」

「じゃ、お父さんは日本が武器を持つことや戦争をすることは仕方がないとかんがえているの？」

「お父さんはね、武器を持つことも戦争に参加することも大反対なんだ。」

「じゃ、敵国が攻めてきたらどうするの？」

「うーん、敵国・・・微妙な表現だな。お父さんは敵が攻めてきたら身近なものを武器にして戦うよ。ここのところは、第二次世界大戦後の植民地から独立するベトナムやキューバ、中国の革命を勉強してからもう一度考えてみよう。」私は社会的な疑問を持ち始めた娘に答えを押し付けるよりも、革命という歴史と戦争と経済を勉強した後で「階級的視点」を説明してからでも遅くないと思った。

のある企業、良い商品やサービスを提供している企業の株式を購入することによってその企業を支援することで企業の評価は株式市場で行われ、評価（株価）が高くなったところで、株式を売却して利益を出すことができる。そのほかにも会社が得た利益の還元として配当をもらったりすることもあるが、基本は値上がりで得をすることがメインなんだ。これをキャピタルゲインというから覚えておこう。」

娘は不思議そうな顔をしていた。

「お父さん、誰でも株は買えるの？」

「そうだよ、証券会社に口座を作れば、誰でも株の売買をすることができるんだ。ただ、思惑通りに、自分の購入した株式が値を上げて、利益を得るとは限らない。マネーゲームだから損をすることもある。だから投資のひとつだと思えばいい。世界大恐慌のときは、皆が資産を運用するためにしていた株式が大暴落をして紙くずになったんだ。世界は失業者と自殺者の群れとなったんだ。」

「なかなか投資ってうまくいかないんだね。」

「所詮、マネーゲームだからね。皆が損をしたのだけれど、安くなった株式を買えた人たちがいる。そう、金持ち。金持ちは株式がやすくなったので、株を買い占めたんだ。」

「そうか、すごい得するよね、その金持ち。」

「その金持ちを『モルガン財閥』『ロックフェラー財閥』とはっきり固有名詞をつかって説明することにしよう。この財閥はアメリカ国民や国際関係の仕事をしている人はみな知っている財閥だ。恐慌が起きるたびにこれらの財閥は儲けて大きくなってきたんだ。」

「まるでこの財閥たちが恐慌を起こしたような言い方だね。」

「いや、そういった見方もできるんだ。風船を大きく膨らまし、針をさして破裂させたのは彼らだと考えてもいい。お父さんがこれから話していくごとにそれがなんとなく分かるようになるよ。」

「どのくらい儲けたの？」

「モルガンが 444 社で資産額が 776 億ドル。ロックフェラーが 287 社で資産総額 449 億ドル。」

「ドル？よこくわからないや」

「たったこの二つの財閥の手にした額は合計で 1225 億ドル、今日の 450 兆円ほどだった。この数字は「アメリカの大企業上位 200 社を並べたとき資産総額の 65% をモルガンとロックフェラーで支配したことになるんだ。（広瀬隆著・億万長者はハリウッドを殺す・講談社より）参考までに日本の国家予算は 85 兆円なんだ。」

「恐慌が起きて、財閥が会社を支配すると恐慌が終わるの？」

「そういうわけにはいかない。アメリカではフランクリン・ルーズベルトがニューディール政策を行うことになる。」

「ニューディール？」

「そう、経済政策を国が積極的に行って景気を良くしようとしたんだ。具体的には、テネ

シー川流域の公共事業が中心だった。しかし景気は良くならなかった。太りすぎた大企業にはもっと大きな仕事が必要だったんだ。」

「で、どうなったの？」

「戦争、つまり第二次世界大戦で使われた銃器、弾薬、軍用機、軍用車両、艦船、ミサイル、核兵器などの兵器を工場をフル稼働させて作ることでアメリカ経済は息を吹き返し、さらに巨大に膨れ上がっていたんだ。」

「そうか、そこで第二次世界大戦につながっていくんだね。」

「実は教科書には出てこないけれどももう少し奥深くアメリカ経済を見てみよう。ファシズムという名の下にドイツ・イタリア・日本が連合を組み、イギリスやアメリカや中国と戦った戦争が第二次世界大戦だったよね。」

「ファシズムって何？」

「ファシズムというのは、共産主義、自由主義、民主主義、平和主義を嫌い、国内では極端に自分の国の文化や経済が一番すばらしいと考え暴力的な独裁政治を引くことだ。外国に公然と侵略をおこなったした。」

「共産主義？自由主義？」

「そう、財産や日頃の仕事を共有するというか、国有化する考え方なんだ。自由主義というのは聞こえがいいけれど、経済活動の自由、つまり仕事を自由にしていいよということなんだ。実際の世界では、権力が集中したり、経済発展は早いけれど貧富の差ができたりと、どちらかの主義によって理想の社会ができるというわけではないんだ。ヒトラーは自分に対する絶対の服従と反対者に対する過酷な弾圧、対外的には反共産主義を掲げ侵略を続けたんだ。」

「聞いているだけで怖い考えだね。」

「うん、そうだね。ドイツやイタリアがヨーロッパを焼け野原にして、ユダヤ人を迫害し、見るに見かねたアメリカがイギリスを助けるべく参戦し、ファシズムの国家を打ち負かしたというのが一般的に言われている史実だ。」

「そんな悪い国をやっつけたアメリカはいい国だね。」

「自由と民主主義の国、アメリカといわれているけれど、実際は正反対なんだ。政治と流れと経済の流れは必ずしも一致しない。経済の流れから見ると逆に写ることもたくさんある。自分が何か国際的にしたいというときに、その経済の流れを知ることが『目的』と『手段』が道をそれないようにする大事な事となるんだ。」

娘は首をかしげた。

「アメリカという国の経済は、第一次世界大戦後から今まで怖いほど一握りの人たちがアメリカの巨大企業の株を持ち、しいては経営権を握っている歴史を持っているんだ。日本でも三井財閥、三菱財閥、住友財閥が有名だけれど、アメリカでは規模が桁外れに大きんだ。」

「教科書に書いてないよ。」

「そうだね、大学でもこのようなことを言うと、陰謀論は経済学から外れるという人をずいぶん見てきた。お父さんも誰かが陰謀して世界を動かしているというつもりはない。ただ、世界の 2 大金持ちが世界経済の流れを作り、企業も政治家もグループを作って競争しているのは確かだと思う。ビジネスの世界で経済と関わる人にとっては常識となっているんだ。外国人に聞くと意外と常識のように知っている。」

「なんていうの。そのお金持ち？」

「アメリカには石油ビジネスから巨大化したロックフェラー財閥、一次大戦後に鉄道、電気、電話、自動車産業を支配したモルガン財閥が当時の 2 大財閥だったんだ。」

「ロックフェラー財閥とモルガン財閥？」

「そう、あとヨーロッパにはロスチャイルド財閥というこれまた超巨大な財閥がある。いずれの財閥の子孫、直系の一族は強い結束をして世界の財界にたいして圧倒的な力を持っているんだ。」

「ロスチャイルド財閥？そんなに有名なの？」

「ヨーロッパの人々はみんな知っている。ロスチャイルドはユダヤ人財閥として今でも絶大な力を持っているし、ロックフェラー財閥は今でもアメリカの保守本流と呼ばれ、2000 年にモルガン財閥を吸収合併することになるんだ。世界でいまでもアメリカのロックフェラー財閥のメインバンク、JP モルガン・チェースマンハッタン銀行は絶大な力を誇っているんだ。ロスチャイルド財閥はゴールドマン・サックス銀行やロスチャイルド銀行、HSBC グループなど金融部門には絶大な力を今も持っている。日本の財閥もこの系列に属しているんだよ。たとえばロックフェラー組は三井財閥、ロスチャイルド組は三菱財閥って感じだ。」

「じゃあ、世界で有名な財閥はロックフェラーとロスチャイルド財閥と覚えておくね。銀行の名前なんて難しく分からないや。」

「それでいい。石油で有名になったロックフェラーと金融関係で有名になったロスチャイルドをまず踏まえておこう。あと忘れてはいけないのは、モルガン財閥の存在だ。」

「あっそうそう、アメリカの巨大財閥のひとつだったね。」

「そのとおり。そのモルガン財閥がなぜアメリカの経済の中でいろいろな巨大企業を支配するほど力があつたと思う？」

娘は笑いながら言った。

「誰かがお金をくれたから。」

私も笑いながら答えた。

「実は正解に近い。モルガン財閥は天下のロスチャイルド財閥が支援していたんだ。ロスチャイルド財閥は何とかしてアメリカ経済の中で企業を買収してアメリカの産業を傘下におきたかったんだ。」

「ロスチャイルドは自分でアメリカに乗り込めばいいのに。」

「その考え方も分かる。しかし、世界には人種問題というものがある。アメリカ人はイギ

リスから植民地アメリカへ移民してきた人々の直系の子孫なんだ。そこで民族的にはアングロサクソン系白人で、かつ宗教的にはプロテスタントであるとされている。」

「難しくて分からないよ。」

「ごめんごめん。典型的なアメリカ人を **WASP** と書いて『ワズプ』と呼ぶんだ。白人のキリスト教徒という意味かな。」

「ところがロスチャイルドはユダヤ人のユダヤ教の財閥だから、アメリカ経済に入り込むには抵抗があるんだ。特にユダヤ人というのは迫害され続けた歴史から、すぐに移動できるように金融とか宝石とか身軽な商売を得意としてきたんだ。そのユダヤ人にアメリカのワズプが警戒感を持つのも理解できるよね。」

「うん、それでモルガン財閥を使ってアメリカを支配しようとしたの？」

「そのとおり。これから言うことを良く覚えておくといい。『ユダヤ人』が世界の陰謀を企んでいるというのは間違いなんだ。もっと具体的に『ロスチャイルド財閥』が巨大なマネーを使って産業つまり企業を支配しようとしているというのが正しい。その『ロスチャイルド財閥』と競争していたのが『ロックフェラー財閥』なんだ。」

「つまり、ロスチャイルド組とロックフェラー組があるってこと？」

「そう、それを企業系列というんだ。大きな勢力があると、大きなビジネスや企業活動をしていくときにどちらかの組に巻き込まれてしまうんだ。それは、企業活動はさまざまな経済要因や政治的要因に左右されるため仕方がないことなんだ。今の世界は大きな企業になるほど 2 大勢力のどちらかに影響を受けることになる。だからこそ円滑にビジネスを進めるためにどちらかの組の流れに乗ることになるんだ。」

「ロスチャイルド組にモルガン財閥は入っているということなの？」

「そう、それも正解。気をつけなくてはいけないのは、企業系列というのは、人種や宗教で分けることができないということなんだ。ほら、ロスチャイルド財閥はユダヤ系だけでも、アメリカでの実行部隊のモルガン財閥はユダヤではなく **WASP** だよ。そんな事例はこれからいっぱい出てくるよ。」

「あっそうか。」

私はゆっくりとしゃべった。

「ポイントになるのは、企業方針なんだ。ロックフェラー組の方針はアラブ諸国と仲良くし、中国、東南アジア・インド・中南米の国々で企業を育て、輸出入を積極的にしていくことで成長することを狙いとしている。」

「じゃあ、ロスチャイルド組は？」

「ロスチャイルドはユダヤ人なので、ユダヤ人の国・イスラエルが大きく強くなること、つまりイスラエルと仲の悪いアラブ人への抵抗が基本姿勢にあるんだ。それをシオニズム運動というから覚えておこう。その他として現在の先進国の中での企業活動を優先する向きもある。ウランの利権を握っているために原子力発電推進の主流でもあるんだ。」

「何でイスラエルとアラブの国は仲が悪いの？アラブってどこ？」

「そうだね、その問題はしばらく後で出てくるから今は仲が悪いことだけ覚えておけば良いよ。」

「それでそのロックフェラー組とロスチャイルド組が世界に世界経済の中で大きな存在だというのは分かったけれど、それが第二次世界大戦とどんな風にかかわってくるの？」

と娘が切り返してきた。私はここが重要とばかりにゆっくり話をした。

「東西冷戦を考えると良く分かるんだ。」

「東西冷戦って？」

「アメリカ合衆国を盟主とする資本主義・自由主義陣営と、ソビエト連邦を盟主とする共産主義・社会主義陣営との対立構造が第二次世界大戦後に出来上がったんだ。アメリカと旧ソ連の代理戦争が世界で行われた。1950年の朝鮮戦争や1965年のベトナム戦争、1979年のアフガニスタン内戦等があり、そのたびにアメリカとソ連は敵対する勢力に軍事援助をすることになったんだ。」

//

Coffee break2:

資本主義とはみんな自由に利益を求めて仕事をし、利益を出したら自分のものにしていいよ、欲しい人とあげたい人の関係（需要と供給）で価格はきまるシステム（市場）とマネーを重要視した社会。すると、この主義では、わずかな金持ちが生まれ、たくさんの労働者から利益をむさぼり、貧困・失業・恐慌などの社会矛盾がうまれた。

社会主義では、働く人々が連帯し、平等・公正な共同社会をめざした主義。機械、道具原材料などの生産手段を国のもの（国有化）とした。市場に頼らず国家が計画をつくりその計画に基づいて、モノを生産し、その生産物を分配することで成り立つ社会。貧富の差が少ない社会のはずだった。商品の流通や金融は国家が統制・運営した。しかし、この主義では独裁体制が生まれやすく、報道の自由も著しく規制された社会となった。ソ連が好例。

共産主義とは、社会主義と同じ扱いをされることが多い。社会主義の進歩した主義で、厳密には、労働に応じて分配生産物が分配されるのが社会主義に対して、必要に応じて分配されるのが共産主義。必死に働いても取り分が一緒なので、労働は怠慢になり経済は資本主義よりおくれやすい。

『プロト工業化理論』が主義を考える中で私にはヒントを与えてくれました。参考までに。

//

「学校で習ったよ。東西に分かれた国同士が国の戦争するための道具を競争で買いあさったんだよね。そして世界が兵器だらけになったんでしょ。」

「そのとおりだ。あのときに私たち世界のさまざまな国民はすっかりだまされた。政治的な見方だけが一人歩きして、経済の流れを見なかったからだ。あの時、軍拡競争にしっかりとノーと言い、『核兵器を落とせるものなら落としてみろ』と発言するべきだった。」

「えっ、核兵器が落ちたら大変だよ」

「そうだね、でも東西冷戦は茶番劇なんだ。太りきった軍需産業をもうけさせる口実だったんだ。第二次世界大戦以降、大きな戦争として白人が白人を大量虐殺することはほとんどなかった。1999年のNATOによるセルビア空爆は例外と考えていい。これは石油を運ぶパイプラインのおおきな利権が絡んだためだったんだ。ヨーロッパの先進国やアメリカなどの血筋の濃い白人の国々では必ず戦争は起きないんだ。」

「戦争をするのは有色人種の国々ってこと？」

「そういうことになるね。ほら歴史上、有色人種同士に殺し合いをさせて、影でアメリカと旧ソ連は自分のおおきの支持する勢力に援助をして利権を手にしようとしたんだ。」

「ほんとだ、そういうことになるね。」

「お父さんは、白人の中に白人は有色人種より偉いんだ、という考え方は根強く残っている。それを白人優越主義というんだ。お父さんが世界を旅したときに、傲慢な白人は多かった。中には当然、素敵な白人もいたけれどね。」

「第二次世界大戦以降、世界ではモノやマネーが国境を越えたため、先進国の企業は自分の国以外に工場などの支店を作っていたんだ。政治は経済の理屈で動くものなんだ。財界は政治家に献金し政治家を操り人形にしている現実があるんだ。つまり東西冷戦が起きれば、お金をかけて作った自分の工場や支店を企業家あるいは財閥は失うことになる。そんなことを政治家にやらせるはずがないんだ。」

「なるほどね。でもお父さん、まず、ヒトラーがいて、そして世界経済におおきな影響を与えるロックフェラー組とロスチャイルド組があって、第二次世界大戦と東西冷戦の枠組みがどうして関係してくるの？」

「本当にいい質問だね。」

「ちっともヒトラーの話につながらないよ。」

「ごめん、ごめん。ロックフェラー組とロスチャイルド組は企業の群れ、つまり企業群だから、お互いに負けないように競争する対立するグループなんだ。おおきな枠組みで考えると、アメリカはロックフェラー、ロシアやイギリスはロスチャイルドなんだ。さっきの東西冷戦や世界大戦もその構造の中にあるんだよ。」

「あれれ、お父さん、それは変だよ。だって、ファシズムのドイツ・イタリア・日本の連合と戦ったのは、イギリスやアメリカやソ連といった連合国だと教わったよ。」

「それは政治の世界の話なんだ。実際はさらに複雑に経済は入り組んでいるんだ。ヒトラー

一の話をお話の話を踏まえてもう一度考えてみようよ。」

「うん、まずヒトラーのドイツでファシズムがすごかったんだよね。」

「そうだけれどもその前に、ヒトラーという人は画家や建築家だったんだ。そんな青年が『ドイツの総統』と呼ばれるようになるには誰かが彼を偉くしたわけだ。よほどのお金が彼のために使われたはずだ。」

「だれがヒトラーを偉くしたの?何のために?」

「いい質問だ。そこが肝心だ。」

「そんな悪いヒトラーを支援するなんて、よほど悪いやつなんでしょ。」

「そこで経済の流れを見るんだ。ヒトラーの資金源はどこか?これを考えることで第二次世界大戦の本当の枠組みが見えてくるんだ。」

「1932年にはナチスがすでに第一党に躍進した。そんなヒトラーの政治資金をクルト・シュレーダーという男、これまたヨーロッパの財閥の男爵なんだけれど、彼が全面的にバックアップしてきた。彼は、ヨーロッパの財閥のひとつで、なぜか敵国とされているアメリカでロックフェラーと結びつきビジネスを拡大していたんだ。」

「クルト・シュレーダー?はナチス・ヒトラーの仲間なの?」

「そう、クルト・シュレーダーは熱烈なナチスを応援するナチズム信仰者だった。そのクルトシュレーダーをロックフェラー財閥は応援したんだ。アメリカは敵国なのにおかしいでしょ。」

「変な話。ヒトラーをなぜアメリカのロックフェラーは応援したの?」

「ヒトラーが力をつけ、政権を独裁する時代に、アメリカとドイツやヨーロッパの財界は共産主義をととても恐れていたんだ。」

「どうして共産主義を恐れたの?」

「うん、共産主義になるとその国での利権、つまりもうけるための権利をその国にすべて没収されてしまうからだ。」

「そうか、その国でもうける仕組みや権利を持っている企業や財閥には困ったことになるね。」

「そのとおり、だから、実際に経済界では反共産主義を掲げるヒトラーにさまざまなアメリカの企業が手を差し伸べたんだ。でも本当にアメリカの経済が手を組んでいた相手は、ドイツやヨーロッパの銀行家や企業たちだということもこれから分かってくるんだ。政治家はいつの時代でも操り人形であり、捨て駒なんだ。」

「えっ、ヒトラーが偉いんじゃないの?政治家がリーダーじゃないの?」

「ある国のトップの政治家になる人は、それなりの企業や財閥の資金源が必要になるからだ。だからこそその企業家や財閥の意向が政治に反映されるんだ。」

「へえーヒトラーは利用されたということになるんだね。」

「うん、しかも前に話したように、当時のアメリカの巨大企業はモルガン財閥やロックフェラー財閥が支配していたと話したよね。実はモルガン財閥もアメリカの企業を通して、

ヒトラーに資金や技術援助をしていたんだ。」

「ヒトラーが敵国アメリカの財界とつながりがあったなんて驚きだね。」

「ああ、ヒトラーは政権をとると、アメリカとドイツの企業の代表団を招待して会議を開いている。そしてアメリカの巨大自動車会社の自動車王ヘンリー・フォードは反ユダヤ主義で有名なんだけど、ヒトラーに影響を与え、ヒトラーはフォードに勲章を与えたりしていたんだ。」

////////////////////////////////////

Coffee break2:

クルトシュレーダー男爵はシュレーダー銀行、シュレーダー信託、シュレーダー・ロックフェラー投資商會をアメリカに展開しアメリカの金融界・ウォール街で力を誇示した。そのビジネスを助けたのがロックフェラーとアメリカの実力者ジョン・フォスター・ダレスとアレン・ダレスの兄弟だった。ダレス兄弟はドイツとアメリカの企業連合が生まれるためにはサリヴァン＝クロムウェル法律事務所が関与していた。アレン・ダレスはシュレーダー銀行の重役でもあった。この法律事務所は単なる法律事務所ではなく、モルガンとロックフェラー連合の指令塔的な役割を担う巨大法律事務所である。この事務所のメンバーは40を越える銀行と大企業の重役を勤める巨大な投資会社であった。

企業間の具体的な動きとしては、

- ①まずアメリカの超巨大オイルビジネスであり、ロックフェラーの母体であるニュージャージー・スタンダード石油（現在のエクソン）はドイツ最大の化学トラスト「IG ファルベン」と同盟を結んだ。「IG ファルベン」の化学技術は有名で、当時アメリカは化粧品やゴム製品の多くをこの企業から輸入していた。アメリカは合成ゴムや化学フィルム等の製法等の化学技術を共同研究していた。IG ファルベンの重役にジョン・ダレスの名前がある。彼は後の国務長官である。またIG ファルベンはアウシュヴィッツの隣に合成ゴム工場を作り、収容所のユダヤ人を奴隷として使用していた。また軍需産業の「デュポン社」、石油大手の「スタンダード・オイル・ニュージャージー」「GM」とも協定を結んでいた。後にテトラエチル製造工場を共同で建設し、ナチスの兵器に使われていくことになった。サリバン・クロムウェル法律事務所とダレス兄弟、つまりアメリカの資本がドイツのIG ファルベンを完全にバックアップしていた歴然たる事実である。
- ②ゼネラル・エレクトリック（GE）はドイツの電気トラスト「AEG」と同盟関係を築いた。
- ③ゼネラル・モーターズ（GM）はドイツ・アダム・オペルを子会社化した。
- ④ウェ스팅ハウス社はドイツの電気メーカー、ジーメンスと同盟関係にあった。

ジーメンスはアウシュビッツ等の収容所で使われたガス室の設備を研究し、毒ガスのシステムを生み出し特許をとり虐殺を投機ビジネスとして使用していくことになった。

////////////////////////////////////

矛盾をとく鍵は『まけない賭け』

「あれ、複雑だよ、この話。ヒトラーによって迫害されたのはユダヤ人だよ。モルガン財閥はロスチャイルド組でお父さんのいうシオニストでユダヤ人だよ。自分たちを迫害するヒトラーと組んでいたなんておかしいよ。」

「いいところに気がついたね。ここは非常に重要なところなんだ。ロスチャイルド財閥は悲しいユダヤの歴史を背負っているんだ。絶えず、ヨーロッパや世界各地で迫害の恐怖と隣りあわせだったんだ。そこで彼らは絶えず移動のできるビジネスを選ぶようになる。だから、金融・流通・知的職業（マスコミ・医師・弁護士・学者・芸術家など）といった職業を好んだし、その部門に強大なネットワークをもっていた。いつでも全財産をもって逃げることができることが必須だったんだ。逆にロックフェラーは土地にどっしりと構える、製造業や農業にめっぽう強い関係もあったんだ。すごいのは、ロスチャイルドのやり方はいろいろな手を使って必ず設ける方法をとることだ。」

「必ず設ける方法ってどんな方法なの？」

「ロスチャイルドの方法は設けるためにはこだわらないということだ。何にこだわらないかということ、国家というものに一切こだわらないということだ。儲かると思えば、どこの国家でも投資の対象とする。戦争が起こるときは、敵対関係の両方の国に金融での援助や企業同士の同盟を画策するんだ。どちらが勝っても儲かる必勝の方法をとるんだ。敵味方に関わらず金を貸したりするためには国際政治の表舞台に立つわけにも行かず、またその仕組みに気付かれ敵視され、迫害されるのを避けるためにも決して国際舞台には表立たつわけには行かないんだ。裏社会で黒幕としてそっと存在するんだ。」

「それってずるいというか、すごいというか・・・」

「彼らは徹底的だから、キリスト教に改宗し、キリスト教社会の中でそっとビジネスをしていることも多い。ロスチャイルドのネットワークは世界の水面下でそっと且つ強固に結ばれているんだ。イギリスの上流階級の総元締めみたいなもんだ。」

「ロスチャイルド財閥はイギリスが中心なの？」

「そのとおり。ロスチャイルドロスチャイルド1世には5人の息子がいた。その息子たちはヨーロッパのドイツ、フランクフルトに長男アマシェルが、オーストリアのウィーンに次男サロモンが、イギリスのロンドンに三男ネイサンが、イタリアのナポリに四男カールが、フランスのパリに五男ジェームズがそれぞれ支店を任された。ロスチャイルドの力はヨーロッパ中に張り巡らされたんだ。中でもロンドンのネイサンの影響力を巨大になったんだ。」

「ヨーロッパでロスチャイルド財閥の力はすごかったんだね。」

「ヒトラーはそんなロックフェラーやロスチャイルドたちから援助をもらって、力をつけていったんだね。」

「正しい言葉を使うなら、アメリカとドイツの銀行や企業がよってたかってヒトラーにファシズムを広げさせ共産主義を撲滅使用としたんだ。」

「でもお父さん、国民はなぜヒトラーを支持したの？ユダヤ人を迫害するような政治を支持するなんて不思議だな。」

「まず国民と国家権力は必ず別なものとして考えるようにするんだよ。確かにユダヤ人を迫害したナチスを当時のドイツ人は選挙で選んだ。だからといって全てのドイツ人が悪いとすれば、アジアで侵略を繰り返した日本人はどうなる？」

「日本人も全て悪いことになっちゃう。でも私は当時のことをいわれても・・・」

「そうだね。世界中の国民が悪いことになっちゃって進歩がまるでなくなってしまうよね。」

「じゃあ、どうやって考えたらいいの？」

「対立する関係を『国対国』と考えないことだよ。」

「日本対アメリカと考えるのはだめだということ？」

「そうなんだ。歴史なんかを説明をするときは仕方ないけれど、心情的というか倫理的というか道徳的に考えるときは違う考え方が良いんだ。」

「どんな考え方？」

「階級的な考え方というんだけど、国家を支配する側と支配される側、つまり国民とに分けてしまう考え方だ。それは『戦争をして設ける側』と『戦争をして殺され損をする側』と考えてもいい。つまり当時のドイツには戦争をして儲けるヒトラーやそれを支えるドイツの企業家や財閥がいた。その人たちとは別に、戦争をして殺されたり大切な人を失ったりして損をする国民がドイツにもいた。アメリカにも戦場で殺される兵士もいたし、戦争に反対する人々もいた。だったら、ドイツ対アメリカとか日本対中国という考え方を捨てて、『ドイツやアメリカの戦争をして儲けている人々』対『ドイツやアメリカにいる、戦争で殺されたり、戦争に反対したりする大衆』という位置づけでよいと思うんだ。」

「じゃあ、日本と中国の戦争では、『日本の軍国主義、戦争で得をする側』対『日本・中国の損をする大衆』ということになるわけか。」

「国対国という考えかたよりもすっきりするね。」

「大事なのは、だからこそ自分の属する国家、国に対して責任をもって行動や発言をしていくことが大人になるということなんだ。」

「確かに国対国と考えると永遠に罪の擦り付け合いばかりで、世界が醜くなるね。」

私はふと日本の軍国主義が権力によって知らず知らずのうちに日本国民を巧みに洗脳したことを考えていた。私はコーヒーを飲み干してから、ある意味では天才であるヒトラーのやり方について話をすることにした。

ヒトラーの心理術と皆が yes という社会

私はヒトラーの心理学を少し話すことにした。というのは、何もおこらない穏やかな日常のときこそ軍国主義といった危険思想はわれわれの周りに用意周到に忍び寄るからだ。

「ヒトラーの話を少ししよう。」

「私、ヒトラーがなぜ国民から指示を得たのか聞きたい。」

「うん、そこも重要だ。ナチスに神秘的な力を感じさせ、ドイツ国民を熱狂させるためには圧倒的に優れた心理学が作用していたんだ。社会の中で、ひとつの価値観を皆で正しいとし熱狂的になるとき、そこには世論を誘導する強力な力がマスコミや心理学を利用して作用していると考えていい。そんな時、僕たち国民は冷静に立ち止まって検証する考え方が必要とされるんだ。」

「心理学？」

「ヒトラーの演説は一度聞く価値があると思う。非常に良くできているんだ。大衆が静まるまでずっと静かに待ち続け、語りかけるように演説を始める。そして大事なところ来ると、オーバーアクションで何度も何度も繰り返しポイントを繰り返す。」

「なぜ何度も繰り返すの？」

「大衆は演説の論点を忘れやすいからだ。さらに、演説の会場を見るとこれまた工夫されている。肩が接するほどの狭い会場を使っていた。しかも薄暗く、太鼓の音を響かせる。酔いしれた大衆なのかサクラなのか『ハイル・ヒトラー』と叫ぶと会場のいたるところで掛け声が連呼される。」

「狭い会場の何が心理学なの？」

「人間は半径 1m 以内に他人が入ることを警戒する心理があるんだ。肩が接するほど四方に他人がいるとその警戒心が解かれ、心理的に無防備になる。薄暗いのも心理的に陶醉しやすい状況を作っているんだ。そこに振動が伝わる大きな太古の音で興奮状況を作り、会場で叫び、手を上げるなどの興奮したアクションが周囲で起きると、人は自分の殻をやぶり、さらには自分もアクションを起こし興奮をするようになる。陶醉した集団を作るお見本みたいなものだ。しかもヒトラーの演説のアクションは何度も鏡で練習し研究されて使われたいたほどだ。」

「へえー見てみたいな。」

「ヒトラーを題材にした天下の名作『独裁者』という映画を一度見ておくんだな。」

「誰が主演なの？」

「知る人ぞ知る平和主義者、チャーリー・チャップリンだ。『独裁者』の最後の 6 分間は『世紀の 6 分間』といわれ、若い人は必ず一度は見ておく必要があると思うよ。」

「どんな言葉をいうの？」

「それは見てからの楽しみ。でも話し言葉で理解するのは大変だから、活字のメモをあげよう。映画を見たらゆっくり噛み締めながら熟読するといい。」

-memo

私は皇帝にはなりたくない。支配はしたくない。できれば援助したい。ユダヤ人も黒人も白人も、人類はお互いに助け合うべきだ。他人の幸福を念願として、お互いに憎み合ったりしてはいけない。

世界には全人類を養う富が在る。人生は自由で楽しいはずのものなのに、食欲が人類を毒し、憎悪をもたらし、悲劇と流血を招いた。スピードも意志を通さず、機械は貧富の差を作り、知識を得て人類は懐疑的になった。思想だけがあって感情が無く、人間性が失われた。知識よりも思いやりが必要だ。思いやりがないと暴力だけが残る。

航空機とラジオは、我々を接近させ、人類の良心に呼びかけて、世界を一つにする力がある。私の声は全世界に伝わり、失意の人々にも届いている。これらの人々は、罪無くして苦しんでいる。人々よ、失望してはならない。食欲はやがて姿を消し、恐怖もやがて消え去り、独裁者は死に絶える。大衆は再び権力を取り戻し、自由は決して失われない！

兵士諸君、犠牲になるな！ 独裁者の奴隷になるな！ 彼らは諸君を欺き、犠牲を強いて家畜のように追い廻している。彼らは人間ではない！ 心も頭も機械に等しい。諸君は機械ではない！ 人間なのだ！ 心に愛を抱いている。愛を知らない者だけが憎しみあうのだ。兵士諸君、さあ、独裁者を排除して自由のために戦おう！

神の王国は人間の中に在る。一人物や一組織の中ではなく総ての人間の中、諸君の中にあるのだ！ 諸君は幸福を生む力を持っている。人生は美しく、自由で素晴らしいものだ！ 我々の力を民主主義のために結集しよう！

良き世界のために戦おう！ 青年に希望を与え、老人に保証を与えよう！ 独裁者も同じ約束をした。だが彼らは約束を守らない。彼らの野心を満たし、大衆を奴隷にしたのだ！ さあ、戦おう！ 約束を果たすために。世界に自由をもたらし、国境を取り払い、食欲と憎悪を追放しよう！ 良識のために戦おう！ 科学・文化の進歩が全人類を幸福に導くように。兵士諸君！ 民主主義の名において、我ら総ての力を結集しよう！

ハンナ、聞こえるかい？ 元気をお出し。ご覧！ 暗い雲は消え去って、太陽が輝いている。明るい世界が開けてきた。人類は食欲と憎悪と暴力を克服したんだ。人間の魂は翼を与えられて、やっと飛び始めた。虹の中に飛び始めたんだ。希望に輝く未来に向かって。

輝かしい未来が、君にも私にもやってくるんだ。我々総てに！

ハンナ、元気をお出し！ ハンナ、聞いたかい？ 聞きなさい」

--

「ヒトラーは心理学的にすぐれた広告宣伝をただけでもない。世界大恐慌であふれた 600 万人の失業者を激減させた。そのための公共事情がドイツ・オーストリア・スイスの自動車高速道路、アウトバーン建設だ。大衆車としてフォルクスワーゲンの開発もした。彼は指導者である自分が責任をもって政治を行うとし、大衆は情熱をこめるヒトラーに魅了されていったんだ。」

「そうなんだ、情熱があり、心理学にたけ、目に見える形で経済を良くしたから熱狂的な

支持を得たんだね。恐慌時で絶望感があったから余計に熱狂的に国民はなってしまったんだね。」

「そのとおり、そんなヒトラーの方針が反共産主義だったからアメリカの企業や政府関係者も応援したんだね。」

「なるほど、利用されるだけの人材でもあったわけだ。」

「その後、第一次世界大戦後のパリ講和会議で非武装地帯となったラインラントという場所を、1936年3月7日にドイツ軍がラインラントに進軍し占領したんだ。これを機にヒトラーは独自の侵略路線をとることになるんだよ。そんなヒトラーをドイツの銀行家とドイツの企業、そしてそれと同盟を組むアメリカの銀行家とアメリカの企業とがヒトラーをよってたかって利用していくことになったんだ。」

「政治的に日本と仲良くなったのいつ頃なの？」

「その一年後の1937年に日独伊三国防共協定が結ばれるんだ。それを教唆化する形で1940年に日独伊三国軍事同盟が結ばれるんだ。ではこれから、ドイツ、イタリア、日本の三国同盟を中心とする枢軸国陣営と、イギリス、フランス、アメリカ、ソ連、中国などの連合国陣営との間でたたかわれた第二次世界大戦の経過と一緒に経済の流れを見ていこう。」

第二次世界大戦の経過

「1939年9月1日のドイツ軍によるポーランド侵攻とともにヨーロッパ戦争としてはじまったが、41年6月のドイツによるソ連攻撃と12月の日本のアメリカの真珠湾攻撃によって、戦火は文字どおり全世界に拡大したんだよね。」

「軍隊だけの戦争ではなく、無抵抗の市民を巻き込んだ悲惨な戦いで、今世紀最大の悲劇だと学校で習ったよ。」

「戦費は当時の額でも総額1兆ドルをこえる膨大な額に達し、死者総数約5500万人にのぼる戦争だね。それと大事なのが長距離ロケットや原子爆弾という大量殺戮兵器が登場したことだね。」

「広島や長崎に原爆が落ちたんだよね。」

「いや、きちんと言葉を使おう。アメリカの軍部が原爆を『落とした』んだ。あんな恐ろしいものがなんとなく落ちてきたような言い方は良くない。」

「うん、そりゃそうだ。」

「そう、原爆を、敗北確実の有色人種の国である日本にわざわざ落としたんだ。それは原爆という大量無差別虐殺兵器の発表会だったんだ。その後、この核兵器をめぐる巨大な利権が東西冷戦という事実無根の嘘っぱちな枠組みの中で大量生産されていくんだ。」

「お父さん得意の経済的な動きはどんなだったの？」

「モルガン財閥とロックフェラー財閥はナチスがヨーロッパ全土に侵略戦争を進めていくのを銀行家と企業を使って応援をしていた。そしてナチスの戦争も彼らにとって順調に進んでいったんだ。しかも表立ってはナチスと敵対関係になる連合国に武器輸出を積極的

行ったんだ。」

「联合国って、イギリスやソ連や中国やフランスに？」

「そう、武器貸与法、レンドリース法が 1941 年に成立したんだ。」

「武器貸与法？」

「総額 500 億ドルほどの、膨大な量の武器がアメリカの軍需産業から联合国に流れた。つまり、当時の全産業の 7 割を握るモルガン、ロックフェラーの工場は音を立ててフル回転を始めた。ここで始めて世界大恐慌からアメリカ経済は脱していくことになったんだ。つまり戦争がアメリカの経済の息を吹き返させたんだ。以後アメリカ経済は戦争なくして経済が成り立たないほど戦争に経済活動を依存させていくんだ。戦争経済、つまり軍需と産業構造が一体化した経済構造を『軍産複合体』いうから覚えておこう。」

「戦争なくして動かない経済？そんな経済なの？」

「現代では戦争のほかにもっと効率的に利益を集める方法として『デリバティブ』がある。金融の世界での画期的な商品なんだ。でも所詮マネーゲームの一種だけれどね。これについては別の機会にお話しよう。ただ名前だけは今覚えておこう。」

「授業ではそんな話何も出てこなかったな。」

「さあ、ここからだ。ヒトラーは反共産主義のほかにどんな看板を掲げていたのかな？」

「反ユダヤ主義かな？」

「正解。第二次世界大戦の中では反ユダヤ主義がポイントになってくるんだ。」

「ヒトラーのユダヤ人迫害は習ったよ。アンネの日記だよ。」

「そうだね。ヒトラーはユダヤ人を徹底的に迫害した。ユダヤ人の死者は 600 万人以上といわれているんだ。」

「すごい数のユダヤ人が殺されたんだね。」

「ヒトラーはユダヤ人を強制収容所やゲットーと呼ばれる場所に集合隔離し、奴隷労働をさせたり、ガス室で無差別虐殺を行ったんだ。しかもその奴隷労働や虐殺は全て綿密に企業たちが計算をし利益を出す経済活動の一環として行われていたことが大事なんだ。」

「なぜヒトラーはユダヤ人を迫害したの？」

「ヒトラーの著書『わが闘争』を読むと、第一次世界大戦のドイツ敗北の責任を、ユダヤ人に押し付けたんだ。宗教的な経緯やユダヤ教徒の閉鎖性の問題もあるけれど、大きな理由にはユダヤ人たちの金融界の独占に対する不満などが要因だったんだ。」

「あれ、ロスチャイルド財閥はどうなったの？たしかユダヤ人だったよね。」

「いい質問だね。当時のロスチャイルド財閥はイギリス・ロンドンのロスチャイルドは最後までイギリスが戦って戦勝国となったためヒトラーの迫害は受けていないのは当然だよ。では当時のオーストリアやフランスやドイツのロスチャイルド財閥たちはどうだったのか？」

「ヒトラーの反ユダヤ主義の根本にはユダヤ人の金融支配があったわけだから当然そのトップのロスチャイルド財閥も迫害を受けたんだよね。」

「それが、調べてみるとそうじゃないんだ。ウィーンのリイス・ロスチャイルドが唯一捕らえられたが、彼はヒトラー親衛隊を食事のため待たせたり、収容所ではなくホテルでの生活を強要され、2ヵ月後には300万ドルの保釈金で釈放されている。他のロスチャイルド財閥たちはヒトラーから迫害を受けていない。」

「じゃあ、弱くて貧しいユダヤ人たちが犠牲になって、ヒトラーの狙いであるユダヤ人の金持ちたちは見逃されていたということになるの？」

「そうなんだ。」

「あれだけ気の狂ったようにユダヤ人を殺したヒトラーって不思議だね。」

「逆に考えてみよう。ロスチャイルド財閥とシュレーダーは関係があったし、そもそもロスチャイルド組のモルガン財閥もヒトラーやシュレーダーと組んでいた。それは、ユダヤ財閥というかロスチャイルドのやり方だって以前説明したよね。ほら、戦争があると両方に援助して儲けるって。」

「そういえば、そうだったね。」

「つまりヒトラーもロスチャイルド財閥の強さをよく知っているわけだ。やはりロスチャイルドの報復を恐れたんだよ。」

「なるほどそういうことか。」

「もうひとつ、教科書に出ていないけれど押さえておきたいことがあるんだ。現代でも今なお起きている戦争の根本がここにあるからだ。」

「何んなの、それ？」

「第二次世界大戦中から戦後に起きたユダヤ人の行動なんだ。」

「ユダヤ人が何をしたの？」

「うん、ユダヤ人たちはヒトラーの迫害を恐れ、約束の地とされているユダヤ教の聖地パレスチナでユダヤ人のための国家をつくる運動を始めたんだ。ユダヤ民族は国家を持っていなかったからね。ヒトラー一政権下では27万人のユダヤ人がパレスチナに逃れたんだ。」

「前に出てきた、確か……シオニズム運動だよな。」

「そのとおり。でもパレスチナは国家を持たない別の宗教であるアラブ民族の聖地でもあったんだ。パレスチナ地域の中にあるエルサレムは、ユダヤ教にとってはユダヤ教とイスラム教の聖地だったんだ。」

「別に同じ聖地でもいいじゃん。何が問題になるの？」

「この地を統治していたのが、第一次世界大戦後に進駐したイギリスだったんだ。」

「進駐？」

「軍隊とともにその土地を支配したということだ。イギリスはアラブ人とユダヤ人の両方に支援を双方に秘密にしたんだ。そしてイギリスが責任をもって統治するとしていたんだ。」

「それで？」

「イスラエル建国前のパレスチナに住んでいる人はほとんどがアラブ人だったから、世論

としては、ユダヤ人の国家よりもアラブ人の国家になる。それではまずいと、ユダヤ人はパレスチナに移民する運動にシオニズム運動は展開していったんだ。アラブ人よりユダヤ人の方が多ければ、世論としてユダヤ人国家が建国しやすくなるからね。でもイギリスは、ユダヤ人のパレスチナ移民を規制していたんだ。それに対し、ユダヤ人はテロ活動を行いイギリス政府に対抗したんだ。難民化して次から次へ増え続けるユダヤ人との間で、ユダヤ人とアラブ人は居住地域に不安を感じ、ついには両民族で居住をめぐって争いを始めたんだ。しかもイギリスはパレスチナ問題を放棄して引き揚げてしまったんだ。」

「紳士の国、イギリスだと思っていたのにな。」

「その後、国連でパレスチナはアラブ人領とユダヤ人領に分割されるんだ。3分の1以下のユダヤ人が国土の3分の2以上をなぜか手にするんだ。そしてユダヤ人はエルサレムを首都にイスラエルを建国することになる。」

「アラブ民族は分割案を拒否し、第一次中東戦争が勃発する。1949年イスラエルが勝利し、70万人のアラブ人がパレスチナを追放されるんだ。この人たちがパレスチナ難民というんだ。砂漠でのテント生活を強いられるようになった。国連分割案を上回る地域にまでイスラエル軍は侵攻・占領し続けた領土を拡大したんだ。」

「ユダヤ人はヒトラーに迫害されて、パレスチナへ行き、そこでまるで自分たちがヨーロッパで迫害されたように、アラブ人を迫害していったんだね。」

「現在でもイスラエルは反抗したパレスチナのアラブ人の行動を宣伝し、更なる虐殺の大義名分をつくるとさらに大きな攻撃を繰り返すようになるんだ。さらに戦争は日本の軍需産業によるアジアの植民地化、大東亜共栄圏構想のため日本は参戦することになる。日本では、当時の軍需産業、三井・三菱・住友といった財閥群がにとって天皇を利用した戦争をビジネスとして十分に価値があったんだ。ここまできて、実はアメリカへの真珠湾攻撃で様相が変わってきたんだ。」

「どういうこと？」

「ヒトラーはアメリカの銀行家や企業と影で組んでいたのに、日本がアメリカに攻撃したことにより矛盾が生じたんだ。ほら、日本とイタリアとドイツは同盟を組んでいたからね。きっとヒトラーのほうがアメリカより真珠湾の奇襲を驚いたと思うよ。」

「で、ドイツ・ヒトラーは結果的に同盟国の日本とくっついてアメリカと戦うということになるの？」

「そう、ヒトラーはアメリカを裏切ることになる。アメリカ国内ではヒトラーの反ユダヤ主義の行き過ぎに警戒を感じていたところだったんだ。アメリカ国内のユダヤ系財閥たちもヒトラーに反感を持ってきたんだ。1944年6月にヒトラーがロンドンにロケット攻撃をするんだけど、そのロンドンにシュレーダー男爵は銀行の支店を持っていた。ロスチャイルドのお膝元のイギリスでロスチャイルドと仲良くやっていた巨大銀行のオーナーがシュレーダー男爵だったからね。」

「男爵は怒り狂っただろうな。」

「ヒトラーは所詮、銀行家や巨大企業が利用した操り人形なのに、その人形が財界のリーダーの資産をロケット攻撃したんだから怒るにも当然。ヒトラーは財界のビジネスというものをまるで分からず、オーナーに逆らい、後ろ盾をなくしたんだ。」

「戦争もビジネスだったんだよね。」

「そのとおり。ビジネスだからこそ綿密にことは運ばれる。戦争の敵味方は裏の経済では入り乱れているので、打ち合わせをしながら方針が考えられまるでマネーゲームのように戦争は動いていくんだ。」

「何処で打ち合わせをするの？政治的に敵国同士なのに？」

「世界で絶対に戦争の起きない国、スイスさ。」

「どうして戦争が起きないの？」

「ロスチャイルド財閥やロックフェラー財閥を頂点としたマネーゲームを行う大金持ちたちは世界の安全な金庫にお金を保管するんだ。そんな金融センターは世界におよそ3つある。香港・スイス・カリブ海がそうだ。特にスイスのバーゼルクラブは世界の巨大財閥の集まりであり、彼らのメインバンクなのである。だからこそスイスで戦争が起こってはまずいんだ。」

「なぜ香港・スイス・カリブ海なの？」

「それはこの3地域がそれぞれ、脱税天国を作っているからだ。人を殺して儲けたお金であろうと、資産を完全に隠すことが出来るのだ。しかもそれを公然と国の方針として行っているんだ。タックスヘイブン、つまり税金天国というんだ。これらの国々では、個人情報に完全に保証され、資金を隠すことが完璧なまでに可能になる。警察でさえなすすべがないんだ。贈与税・相続税などは当然存在しないし、利息・配当なども無税である。つまり、世界中の金持ちが脱税のために銀行に金を預けるからさ。戦争もビジネスだったよね。スイスはその大御所であり、戦争の最中に敵味方が入り乱れて脱税天国の総本山であるバーゼルクラブで打ち合わせが行われるんだ。」

「バーゼルクラブ？」

「全世界の財閥が秘密の口座を持つスイスの中でも、バーゼルクラブは富豪の中の富豪の銀行なんだ。金塊で全てを決済しスイスの法律もきかない。しかも5人の理事が独裁権を持っているためいかなる大富豪もバーゼルクラブをのっとることができない仕組みだ。総裁はモルガンの所有するニューヨークのファーストナショナル銀行の取締役のトマス・マッキトリック。重役はクルトシュレーダー男爵、IGファルベンの社長ヘルマン・シュミッツ、ライヒス銀行の総裁ヴォルター・フンク。敵味方の銀行家や企業が机をならべて戦争の今後を相談していた。このバーゼルクラブが本当の戦争指令室であり、戦争というゲームを行うカジノでもある。こんなことから戦争は投機だと分かるよね。覚えておくといい、宗教戦争だろうと民族紛争だろうと、戦争はビジネスであり、利権が絡んでいるためにおきるんだ。」

////////////////////////////////////
Coffee break4:

読者の中には、こんなバーゼルクラブが存在するなどと言うと信じない人々がいるだろう。広瀬隆氏は著作「億万長者はハリウッドを殺す・上巻」（講談社）の中で次のように引用している。以下は引用（孫引き）。（この記事は私の使うデータベースには古くて原文を載せることができなかった。）

1943年5月19日に、『ニューヨーク・タイムズ』紙は次のような一文を載せた。

「スイスのバーゼルにある国際決済銀行（B I S）では、連合国のスイス、スウェーデン、アメリカと、枢軸国のドイツ、イタリアの銀行家たちが、机を並べて仕事をしている。この戦争の中で敵味方が共同事業を行なっているのは筋の通らぬことではないか。一体どのような暗黙の協定があるのか？」

バーゼルクラブとは、第一次世界大戦後ドイツからの賠償金を徴収するために作られた。BIS（国際決済銀行）のことを意味する。全ての国の中央銀行に大きな影響力をもつ。銀行の自己資本比率を規制した BIS 規制により、日本の銀行を弱体化させ、税金をたつぷりと導入させた後、欧米の金融資本は日本の金融機関の資産を吸収合併。買収することに成功した。いわゆる日本バブル崩壊時期の話である。

////////////////////////////////////
「そのカジノでヒトラーは見捨てられたんだね。」

「ロスチャイルド＝モルガン財閥は、ヒトラーの反ユダヤ主義と経済を無視した暴走を止めることを考えたんだ。つまりヒトラーは用無しであり、ヒトラーには戦争というゲームから退いてもらおうということになったんだ。」

「シュレーダーからもロスチャイルドからも見捨てられたわけだ。」

「そればかりじゃない。ロックフェラー組もヒトラーを応援していたよね。よってたかってヒトラーに金をつぎ込んできたけれど、ロックフェラー組にしては目標がすでに達していたんだ。」

「どんな目標？」

「ライバルのロスチャイルド組の本拠地であるヨーロッパを焼け野原にし、ロスチャイルドを弱体化させて、イギリスの植民地や利権を奪うことだったんだ。だから最後までずっと見ているだけで参戦はしなかったんだ。」

「なんか、本当のところはすごい策略があった戦争だったんだ。」

「銀行家や大企業を牛耳る財閥は、ヒトラーのファシストを利用しただけで、ヒトラーと手を組んだわけではなかったんだね。彼らは所詮儲けるためだけに行動をしている団体だから、儲ける為には反ヒトラーにもなる。すごいのは銀行家や巨大企業の利益への執着だね。」

「そしてアメリカがイギリスと一緒にドイツに無差別爆撃をするだね。そしてドイツや日本が敗戦するんだね。」

「この後、イギリスは植民地をなくし、ヨーロッパは焼け野原となる。アメリカはヨーロッパの産業復興のため工場はフル回転を続けることになる。それをマーシャルプランというんだ。1947年から開始され1952年まであのバーゼルクラブが中心となって約130億ドルが使われたんだ。アメリカは余った農産物や工業生産物に使われアメリカは大きな利益をだしたんだ。しかもアメリカはそれらの国を貿易の輸出相手国として使っていくことになる。アメリカの影響力を直接受ける国がヨーロッパにたくさんできたという利点もあったんだ。戦争で壊してその復旧で儲けるといふビジネスは現代まで続いているんだよ。しかも日本を従属国として利用していくことになる。この戦争で本当に負けたのはイギリスなのかも知れないね。」

世界分割

私は戦後の世界の動きを語ることにした。

「1945年第二次世界大戦は終結した。その後勝者による世界分割が行われたんだ。」

「世界分割？」

「そう、たとえば、ドイツは東西に分断されアメリカ・イギリス・フランス占領下の西側とソ連占領下の東に分かれた。ポーランドやバルカン半島でも分割統治が行われた。他に日本はアメリカに占領統治され、南樺太と千島をソ連に統治されることになる。世界は大国の論理により世界は分割されたんだ。その結果、民族が分断され、国家は東西に分けられた。朝鮮半島はアメリカとソ連によって東西冷戦から実際の戦争となり、今なお同じ民族が38度線で分けられている。」

「ニュースで聞いたことがるよ。」

「そうかい、ほかにも東ヨーロッパではソ連の指導のもとソ連の支配権が強くなり、東欧の国々は社会主義国を強要された。」

「日本もアメリカに占領当地されたんだよね。」

「そう、アメリカの兄弟国としてアメリカに従属していくわけだ。そして、ソ連が核実験を成功させ、アメリカ対ソ連という東西冷戦の時代が幕開けしたんだ。」

「お父さんが言うところの嘘っぱちな戦争だったね。」

「以前に話したことを良く覚えていたね。アメリカとソ連が戦争をすることはないんだ。ほら、第二次世界大戦をみても銀行家や大企業などの利益を求めた財界や財閥はヒトラーを利用し、そして利用価値がないと判断するや否や見捨てたよね。戦争はマネーゲームつ

まり投機ビジネスだからそんなに簡単に起こらない。ソ連とアメリカが戦争をするということなどありえないんだ。だって、石油などの地下資源の利権がすでに交錯していたし、ロスチャイルドはアメリカにもソ連にも支店やネットワークを持っている。バーゼルクラブは戦争を仕掛ける意味がないんだ。ただし、この東西冷戦という枠組みは大いに利用価値が高かった。」

「どうして利用価値が高いの？」

「東西冷戦のおかげで、武器や兵器がたくさん売れるからだ。ほら武器輸出国は国連の常任理事国が中心だよ。」

「そうか、兵器がたくさん売れると、アメリカなどの国では工場がどんどん稼動し、経済が上向くんだよね。えーと、軍産複合体だったけ。」

「正解。ロマノフ王朝とロスチャイルド財閥との関係は姻戚的にもビジネスでも密接な関係があったんだ。ソ連対アメリカというとき、ロスチャイルド対ロックフェラーの構造に置き換えると良く分かる構造だね。2007年のニュースでも石油メジャーの英蘭ロイヤル・ダッチ・シェルは、ロシア政府系でロシア最大の石油会社ロスネフチと事業提携で合意したと発表した。同じ石油メジャーの英BPがロシア政府系エネルギー会社のガспロムと提携するニュースも最近流れたばかりだった。何を隠そう、ロックフェラーのスタンダード・ニュージャージー石油（現在のエクソン）に対抗するためのロスチャイルドの石油・天然ガスビジネスがロイヤル・ダッチ・シェルとBP（ブリティッシュ・ペトロリアム）なんだ。」

「なるほどロシアつまり昔のソ連とロスチャイルドのパイプは昔から強いことをよくあらわしている報道なんだね。」

「うん、そして大戦後には有色人種だけの国際会議、バンドン会議が開かれた。」

「バンドン会議？」

「そう、アジア・アフリカ会議とも言うんだ。」

「その会議で何があったの？」

「うん、インドのネルー首相、インドネシア大統領スカルノ、中華人民共和国首相周恩来、エジプト大統領ナセルが中心となって開催した会議で、アメリカやソ連に属さない第三勢力として自分たちを位置づけて、アメリカやソ連といった大国の言うとおりにならないことを明言したんだ。」

「すばらしい会議だね。」

「そうだね。植民地として先進国に利用されないという意思表示だったんだ。こういった流れが民族の独立を支えていくことになる。」

「世界はここで進歩していったんだね。」

次に私は、人間としての生き様を『民族の独立運動』を説明することで、人はいかに生きるべきか、人類の歴史の進歩とは何かを次の世代に伝える試みをしようと思う。